

国語選抜試験

新小五

一 次の——線の読みを書きなさい。

- (4) (1) 客席で落語を聞く。
家の近辺のお店に行く。
- (5) (2) 手紙の消印を見る。
青菜に塩のように元気がなくなる。
- (3) 波しぶきが飛散する。

二 次の——線を漢字で書きなさい。

- (4) (1) ちやくしんの音が鳴る。
歴史にかんしんがある。
- (5) (2) そくたつの手紙を出す。
新聞のこうこくを見る。
- (3) 足元を明かりでてらす。

三 次の各問いに答えなさい。

問一 次の熟語の読み方を、ア～エからそれぞれ選びなさい。

- (2) (1) 絵本
残高
- ア 音読み＋音読み イ 訓読み＋訓読み
ウ 音読み＋訓読み エ 訓読み＋音読み

問二 次の文の主語を、ア～オからそれぞれ選びなさい。

- (2) (1) ア 今度はわたしが妹の頭ごしに聞いた。
イ 徒競走で必死に走ったので一位だった。

次の詩を読んで、問いに答えなさい。

初雪

大木実 おおきみのる

- 1 雪がふって 庭が真っ白
- 2 雪がふって 道も真っ白
- 3 道の向こうの
- 4 前の家の 屋根も真っ白
- 5 まばたきもせず
- 6 えん側で
- 7 積もった雪を不思議そうに見ている
- 8 妹
- 9 — みさちゃん あれは雪
- 10 — つめたい雪
- 11 うちのみさ子が 初めて見る
- 12 雪
- 13 ゆうべふって 今朝やんだ
- 14 今年の初雪

(注) えん側—家屋のへりの部分に張り出してつくられた通路。

問一 第一連(1行目～4行目)に用いられている表現上の工夫として最もふさわしいものを、ア～エから選びなさい。

- ア 言葉の順を入れかえて表現している。
 イ にた言い方をくり返して表現している。
 ウ ものを人間に見立てて表現している。
 エ ほかのものにたとえて表現している。

問二 第一連にえがかれていることとして最もふさわしいものを、ア～エから選びなさい。

- ア 雪がはげしくふり続く様子を、家の中と外とをくらべながらえがいている。
 イ 雪がふったあとの町を歩きながら、目についたものを次々にえがいている。
 ウ はげしくふり続く雪の中を歩きながら、目にとどくかぎりの町の様子をえがいている。
 エ 家のえん側から見える雪がつもったあとの景色を、近くから遠くへと視点を移しながらえがいている。

問三 5行目「まばたきもせず」とありますが、ここから妹のどのような様子がわかりますか。最もふさわしいものを、ア～エから選びなさい。

- ア 興味をもって、じっと見つめる様子。
 イ つまらなそうに、ぼんやり見る様子。
 ウ はずかしそうに、ちらちら見る様子。
 エ まぶしそうに、目を細めてみる様子。

問四 この詩で作者が伝えたいこととして最もふさわしいものを、ア～エから選びなさい。

- ア 今年の初雪に対する作者の喜び。
 イ 初めて見る雪に対する妹のおどろきとおそれ。
 ウ 雪を初めて見る妹に対する兄のあたたかい目。
 エ 初雪の美しさに対する作者のおどろきと感動。

次の文章を読んで、問いに答えなさい。

しまふくろうのお父さんの目は、暗い夜でもよく見えました。どんな小さなものも見のがしません。しかし、魚は湖の底にいて、水面近くにまだあらわれません。

お父さんは、流木にとまって、はねを休めることにしました。

しまふくろうのお父さんは、魚が水面にあらわれるのをしずかに待ちました。はねをたたんでいる時でも、耳をじつとさせています。

あたりは物音一つしません。

しずかなしずかな湖です。

その時、

「ピーッ！」

ひなの声がひびきわたりました。おなかをすかせているのです。

「ポッ！ポッ！」

お父さんはひくく答えました。

「ポッ！」

お母さんも鳴きました。

しずかな湖の上を、親子の声がとびかいます。

その時、月のかげがかすかにゆれて、遠くで魚のはねる音がしました。

しまふくろうのお父さんは、いきおいよくまい上がりました。

「見つけた！」

ねらいをつけます。月の光にきらりとはねが光りました。

「今だ！」

目がかがやき、^②音もなく近づくと、するどいつめで、しまふくろうのお父さんは、しっかりと魚をつかんでまい上がりました。夜空いっばいに大きなつばさがひろがりました。

「お父さんが帰って来るよ。大きな魚を持っているよ。」

^③子どもは、お父さんのあたたかい大きなはねの中に入りました。後ろの湖では、波もんがどんどんひろがってゆきました。

波もんは湖いっばいにひろがりました。魚を食べる親子のすがたも、月の光にゆれました。

しまふくろうのお父さんとお母さんは、夜明けまで、いくども交替で、魚をどりに出かけました。

しまふくろうの親子のすがたは見えなくなりました。

湖に朝ぎりがかかりました。夜明けが近いのです。

山も湖もおおおどかがやきました。いっせいに小鳥たちが鳴き始めました。今日も、湖の一日が始まります。

そのころ、しまふくろうの親子は、大きな木のうろ（あな）の中でねむっています。夕方、また元気なすがたを、あらわしてくれることでしょう。

（手島圭三郎「しまふくろうのみずうみ」より）

問一 しまふくろうは、いつもはどこでねむっていますか。文中から七字で書きぬきなさい。

問二 線①「ポッ！ポッ！」とありますが、しまふくろうのお父さんは何を伝えようとしていると考えられますか。最も

ふさわしいものを、ア～エから選びなさい。

ア うるさくするなどということ。

イ ここにいるから安心しろよということ。

ウ もう少し待っているよということ。

エ お父さんを助けてほしいということ。

問三 線②「音もなく近づくとあります、これはだれがだれのために何をしようとしている様子ですか。三十五字以内で書きなさい。

問四 線③「子どもは、お父さんのあたたかい大きなはねの中に入りました」とありますが、このときの子どもの気持ちとして最もふさわしいものを、ア～エから選びなさい。

ア ためらい

イ 安心

ウ こわさ

エ おどろき

問五 文中の□にあてはまる最もふさわしいものを、ア～エから選びなさい。

ア 星が夜空にかがやくころ

イ 星がいつそう明るくかがやくころ

ウ 星の光が消えたころ

エ 星が夜空にあらわれるころ

問六 この文章で書かれていることに合っているものを、ア～エから選びなさい。

ア しまふくろうは、昼も夜も魚をとっている。

イ しまふくろうは、お父さんだけが魚をとっている。

ウ しまふくろうは、くちばしで魚をとっている。

エ しまふくろうは、暗いところでも目が見える。

次の文章を読んで、問いに答えなさい。

①みなさんの家では、どのような材質のなべを使っていますか？ たぶん、アルミニウムのものが、もっとも多く使われているのではないでしょう。そのほか、ステンレス、耐熱ガラス、銅、それに鉄なべも使っているかもしれません。いまからほんの三、四十年ほどまえまでは「なべ」というと、ほとんどが鉄のもの（鉄をとかして型に流しこんでつくったもの）のなべをさしました。その鉄のなべが、日本全国に使われたのは、江戸時代よりあとのことです。日本ではじめて鉄が使われたのは、ずっと古い時代のことですが、^②もともと日本には、鉄鉱石は多くありません。それで、江戸時代以前には、とぼしい鉄を、おもに、くわやかま、なたなどの農具と、刀、槍などの武器を作るのに使っていました。そして、ふだんの食事を作るのに使うなべやかまには、素焼きの土器が長いあいだ使われてきたのです。日本人は、いまから二千年ほどまえの弥生時代には、すでに平野で水田を作り、イネを栽培して、米を食べていました。それに、それ以前にも、山や野原に火をつけて、その焼けあとにアワやヒエを作る、いわゆる焼畑農業をもっていました。このようなむかしから、日本人は、ヒエやアワ、米などを食べてきたのです。

④このように、これらの穀物は、おもにつぶのままたいて食べるものです。このことは、おなじ穀物でも、粉にひいてパンに焼く麦や、アフリカなどでみられる粉がゆになるミレット（雑穀）とは大きくちがいます。そして、世界全体でみたとき、たぐという方法は、日本をふくむ東アジア地域だけのものです。これは、アワ、ヒエ、米には、てきとうなねばりけがあり、粉にひいてパサパサに分解するよりも、つぶでたいて食べるのが、いちばんおいしい調理法だったからです。

⑤にたきをするには、何よりもなべ・かまが必要です。縄文式土器も弥生式土器も、おもに、にたきをするために生まれたと考えられます。にたきといっても、縄文時代の食べものは、おもに木の实や貝、魚、けもの肉などでした。米をにたわけではありません。とくに、その時代の人間にとっては、収穫量が不安定な狩りよりも、専門的な技術や道具を用いなくても、季節ごとにあるていどの収穫が見こめる、貝や木の实の採集のほうがたいせつだったのです。貝は、シジミやアサリなどの二枚貝が、木の実では、シイやカシの实のようなドングリ類がよく食べられていたようです。

ドングリはそのままではアクが強く、しぶくて食べられたものではありません。□、ドングリを食べるにはアクをぬかなければなりません。⑥それにはいろいろな方法がありますが、かんたんには、なべでにればいいのです。また、貝もなべでにれば、貝がらが自然にひらいて、かんたんに食べることができま。

このように日本では、米をたいて食べはじめた以前の縄文時代から「にる（たく）」という調理法と、そのための土器が生まれていたことがわかります。そして、アワや米などの穀物の栽培が進んでくると、ますます「にる」調理法がさかんになり、さらに「むす」調理法も生まれました。日本人ほど、なべやかまを必要とする民族はほかにはないように思います。

(注) 耐熱——高温の熱を受けても、形や質が変わらないこと。 素焼き——低い温度で焼くこと。
アワやヒエ——アワもヒエもイネのなかま。 穀物——人が主食とするイネ・麦・アワ・豆などの作物。
アク——植物にふくまれている、しぶみ。

問一 ——線①「みなさんの家では、どのような材質のなべを使っていますか？」とありますが、筆者はいくつの材質のなべをあげていますか。漢数字で書きなさい。

問二 ——線②「鉄のなべが、日本全国に使われたしたのは、江戸時代よりあとのことです」とありますが、それまでは食事を作るのに何が使われていましたか。文中から六字で書きぬきなさい。

問三 ——線③「もともと日本には、鉄鉱石は多くありません」とありますが、江戸時代以前には鉄は何を作るのに使われていましたか。文中の言葉を用いて、五字で書きなさい。

問四 ——線④「これらの穀物は、おもにつぶのままたいて食べるものです」について、次の問いに答えなさい。

(1) 「つぶのままたいて食べる」のは、どこの人々ですか。文中の言葉を用いて、十五字前後で書きなさい。

(2) 「これらの穀物」をつぶのままたいて食べるのはなぜですか。その理由をのべた一文を文中からさがし、初めと終わりの五字を書きなさい。

問五 文中の□にあてはまる言葉として最もふさわしいものを、ア～エから選びなさい。

- ア そこで イ そのうえ
ウ あるいは エ ところ

問六 ——線⑤「それ」とありますが、どのような方法をさしていますか。文中の言葉を用いて、十五字以内で書きなさい。